＜第三種郵便物認可＞　産経新聞　平成１２年(2000年)　１月７日　金曜日　１２版　オピニオン　6

オピニオンプラザ　わたしの正論

入選　手嶋　政洋

てしま・まさひろ　昭和48年10月東京都生まれ。26歳。青山学院大学大学院法学研究科修了。早稲田大学大学院政治学研究科在学中。趣味は野球、茶道。三回目の入選。東京都在住。

客観・論理的記述力を高めよう

◆異文化の交流に自己主張を◆

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」という著名な一文で論が進められる「学問のすゝめ」において、福沢諭吉は「賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由って出来（いでく）るものなり」と論じ、学ぶことの重要性を指摘した。

近年わが国ではこの学ぶ能力の衰退、すなわち学力低下に関する話題が頻繁に散見される。しかしながら、たんに従来の意味での学力の回復では結局のところ、進展著しいグローバリゼーションには対応できないと考えられる。何故なら、今後求められる学力とは、これまでの学力と質的に異なるものだからである。国家間の壁が低くなりつつある今日の国際社会であるが、それは同時に、国家間の軋轢を増大させるというパラドクスも生じさせ得る。異文化との接触頻度が高まるためである。

◆知力ベースに日本の発展を◆

現在の学力主義のルーツをたどれば、明治時代にさかのぼる。福沢諭吉が『学問のすゝめ』を世に問うたのが一八七〇年代。彼が打ち立てた「学問」というモノサシは、それまでの封建社会における「身分」に代わる新時代の価値観として、人々に熱狂をもって迎えられた。以降百年余。敗戦などの紆余曲折を経ながらも、人的資源しか持たない日本がここまでの発展を遂げた陰には、学力を機軸とした人材育成システムの大きな貢献があったことは、論を待たない。

しかし、その教育先進国日本に、いま大きなかげりが見えはじめている。その一つの兆候が、近頃さかんに報じられる学生の学力低下だ。原因は様々に取りざたされているが、根底にあるのは国民の教育に対する意識の変化だ。

知的表現力を問われる第15回土光杯（主催・フジサンケイグループ）

無条件に善なるものと信じてきた「学力」に対する懐疑といってもいい。「勉強ができることはいいこと」という単純な前提が崩れ始めたのだ。だが、日本の近未来を考えた時、持てる資源といえば、やはり人と、人が生み出すソフト力にゆきつく。また、さらなる情報化社会の到来が叫ばれる今、知力の価値は増しこそすれ、減ることはない。将来はさておき、当面は知力をベースとする社会が続くであろう。では、脱皮すべき問題点とは何か。まず、これまでの学力主義の最大の問題は、あまりにもプラグマティックな方向に流れてきた点であろう。

学問のもつ実用性は実用性として、非常に大切なものではある。しかし当初の「立身出世の手段」的な色合いが、時代を経るに従って肥大、硬直し、それ以外の意味合いを排除するに至っては、やはり見直しの必要がある。学問の有用性の奥には、真理探究の情熱、真実への希求といった、より高次な目的が横たわっている。単なる手段をはレベルの低下しか生まない。

◆学問の有用性の奥は崇高だ◆

しかし、従来型の学力主義が混沌としてきたのも事実。起源においては、公平な社会の実現に大きく貢献したシステムも、百年の歳月を経れば必然的に制度疲労をおこし、イノベーションを迫られている。

知恵・認識力磨き新時代開こう

《第302回　11月のテーマ》

「これから必要な『学力』とは？」

「これから必要な『学力』とは？」という今回のテーマには、読者の関心も強かったようで、三三九編もの応募があった。さまざまなオピニオンが寄せられたが、総じて高い水準の文章が多く、私自身もいろいろと考えさせられた。

入選第一位の手嶋政洋氏は、オピニオンプラザの常連といってよい大学院生であるが、今回は学力の必要性を日本語の表現論として論じている点がユニークで、論旨も明快であり、審査員の一致した高い評価を得た。

入選第二位の主婦、長嶺さとこさんは、最近重視されている実用教育の論議に欠けている基礎学力の意味を問うており、大切な論点を説得的にのべていた。

佳作の山内司氏は、日本の文化と伝統という視野で学力を論じ、同じく石本聖一氏は、国語力を重視する立場であったが、いずれも主張がはっきりした文章であった。同じ佳作の堀田祐子さんは、高校生らしい誠実さで「常識」の重要性を説いていて、さわやかな印象を得た。

今回は、寺島裕之君、石川玲美さんという中学生の文章が最終審査に残ったのも嬉しかった。

これらの文章を読むかぎり、日本の将来にはまだまだ希望がもてると思ったことが、今回の大きな収穫であったといえよう。

（東京外国語大学学長）

論文を審査して　中嶋嶺雄

日本の将来に希望抱く、大きな収穫

「これから必要な『学力』とは？」という今回のテーマは、読者の関心も強かったようで、三三九編もの応募があった。さまざまなオピニオンが寄せられたが、総じて高い水準の文章が多く、私自身もいろいろと考えさせられた。

入選第一位の手嶋政洋氏は、オピニオンプラザの常連といってよい大学院生であるが、今回は学力の必要性を日本語の表現論として論じている点がユニークで、論旨も明快であり、審査員の一致した高い評価を

◆二十一世紀は知性の時代に◆

こうした議論の訓練により問題対応能力や新しいアイデアも養われるのであり、自己責任や危機管理が一層必要とされる時代では、まさにそうした能力こそが、これまでのたんなる知識偏重型の学力に代わって、今後求められる学力であると考えられる。

二十一世紀は、好むと好まざるとにかかわらず、グローバリゼーション、ボーダーレス化がますます進み、わが国もその中で積極的な役割を果たしていかなければならない。そこでは、たんに知識だけに頼った画一的な、あるいは、ある特定の自己の価値観のみに偏った主観的・印象論的な考えでは対応不可能である。

複眼的視野から多面的な考察・分析を行う能力が求められるのであり、そのためにも、外国語の習得と同時並行的に、上述のトレーニングに基づいた能力が必要となってくるのである。二十一世紀はいわば、たんなる知識ではなく知性が問われる時代なのだ。

入選して一言

「方法論の重要性に焦点を当てた論文が評価され、大変嬉しく感じます。今後も謙虚な姿勢で『知』を紡いでいきたいです」

入選　長嶺さとこ

ながみね・さとこ　昭和34年6月大阪市生まれ。40歳。大阪外国語大学中国語科卒。会社勤務を十年経験、現在主婦。趣味は読書、料理。応募二回で入選二回。横浜市在住。

オピニオンプラザ・わたしの正論に339編（うち女性177編）の応募があり、厳正な審査の結果、入選のほか、次の3人の方が佳作に決まりました（敬称略）。

《佳　作》

山内　司　50歳（県立高校教頭・愛知県）

石本　聖一　64歳（無職・東京都）

堀田　祐子　18歳（高校生・神奈川県）

月間賞入賞者　11月度

第304回　論文募集

《1月のテーマ》

「高齢者パワーを社会に生かす」

総人口に占める高齢者人口は二〇〇六年に二割と推計されますが、高齢者の能力は、まだ十分に活用されていません。しかし高齢者は豊富な経験、知識で就業や福祉サービス、地域活動、生涯学習への参画に意欲旺盛で、日常生活用品の購入にも積極的です。高齢者が機能する社会は新しい文化、歴史を創造する源ともいわれます。その一方、衣・食・住にほぼ満足しても、健康、収入で不安を抱く人もいます。多様化する高齢者パワーをどのように社会に反映すべきか、ご意見をお待ちしています。

原稿枚数　400字詰め原稿用紙（20字×20行）5枚、タテ書き。ワープロの場合はケイ線のない白い紙に印字

応募方法　住所、氏名（本名）、性別、年齢、職業、郵便番号、電話番号（自宅と勤務先）、論文募集を何で知ったかを明記の日本語で書いた未発表の作品で

応募条件　1人1編。原稿は返却しない。応募作品の版権は産経新聞社に帰属する

賞（月間賞）　入選2編（賞金各10万円）、佳作3編（同各3万円）

◆募集要項◆

審査員　櫻田淳（慶応義塾大学講師）▽中嶋嶺雄（東京外国語大学学長）▽真野俊彦（東銀リサーチインターナショナル参与）▽吉田信行（産経新聞社論説委員長）＝敬称略

締め切り　平成12年1月31日（消印有効）

発表　平成12年3月7日付産経新聞朝刊

送り先　〒100-8077　東京都千代田区大手町一ノ七ノ二、産経新聞社正論調査室

雑誌「正論」2月号発売中　ただいま

雑誌「正論」2月号の主な内容は次の通り。

▽〝平等主義〟が日本を衰亡させる（渡部昇一）▽天皇制と武士道という歴史の蓄積（西部邁）▽私が体験した北朝鮮女子刑務所の拷問（李順玉）▽つくる会「国民の歴史」発刊記念シンポ「日本に生まれた誇りと喜びを」（西尾幹二ほか）

書店でお求めにくい方は年間予約をどうぞ。「何月号」からと明記して、はがきを〒100-8077東京都千代田区大手町一ノ七ノ二、産経新聞社雑誌「正論」販売部A係へ。なお年間購読料は12冊で八一六〇円（送料サービス）です。